[課程－２]

審査の結果の要旨

氏名　堀田　久美

本研究は、分娩による肛門括約筋裂傷が原因の肛門失禁予防にむけて、分娩時の肛門括約筋裂傷の予防と早期発見のために、肛門括約筋裂傷の発生要因を明らかするとともに、肛門括約筋裂傷の状態から肛門括約筋裂傷の発生機序を検討することを目的として行われた研究である。

経腟分娩の初産婦を対象として、超音波検査で分娩による肛門括約筋裂傷を正確に評価し、第 3 度・第 4 度会陰裂傷だけではなく、潜在的な肛門括約筋裂傷も含めた肛門括約筋裂傷全体の実態を把握した。さらに、詳細な分娩状況と肛門括約筋裂傷の有無およびその状態を検討した事によって、以下の新しい知見を得ている。

１．　わが国の一般的な経腟分娩の初産婦では、肛門括約筋裂傷は 29%に発生しており、その 97.4%は潜在的な肛門括約筋裂傷であることがはじめて示された。

２．　多数の対象者の分析から、肛門括約筋裂傷の分娩時の要因として、クリステル胎児圧出法あり、全開～排臨 60 分以上、排臨～発露 10 分未満が肛門括約筋裂傷と有意な関連を示し、児頭の速い産道通過と強い外力が関わっていることが示された。

３．　肛門括約筋裂傷の方向は腟側で、肛門括約筋裂傷の範囲は直腸側にあり、肛門括約筋裂傷の左右方向と会陰切開の左右は一致していた。この肛門括約筋裂傷の状態の特徴と分娩状況についての詳細な情報から、肛門括約筋裂傷の発生には、外肛門括約筋への負荷の不均衡や肛門括約筋に隣接する筋肉伸展の関与の可能性が示唆された。

以上、本論文は初産婦における分娩による肛門括約筋裂傷の発生要因を明らかにし、その発生機序の解明の一助となる肛門括約筋裂傷の状態を示している。また、潜在的な肛門括約筋裂傷を含めて肛門括約筋裂傷の要因を検討した初めての研究であり、診療録からの調査では得られない詳細な分娩状況を把握して検討したことにより、助産技術改善への具体的な示唆が得られている。本研究で示された結果は、肛門失禁の予防に向け重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。